堀河題による日吉社奉納百首

――俊成・為家・阿仏尼の奉納百首の比較から見る表現上の違い――

福留瑞美

はじめに

本稿では、『俊成五社百首』『為家七社百首』『阿仏五百首和歌』における各百首の特徴を探るべく、堀河題による奉納百首という同じ条件下で詠まれた百首を比較することで、各作品の性格を明らかにする一助としたいと考えている。

これまでこの三者の奉納和歌はともに作品（五社ないし七社全体）を一つのまとまりとして論じられるばかりで、百首ごと、奉納先ごとに述べられることがないようである。したがって、本稿では各百首ごとの奉納意識や構想などに着目し、今回は堀河題で日吉の神への奉納百首という同じ条件下で詠まれている俊成・為家・阿仏尼の百首を比較検討する。

以下の資料の引用本文については、阿仏尼の百首は冷泉家時雨亭文庫本[1]により、それ以外の和歌については『新編国歌大観』に拠る。また和歌下に付した［　］は堀河題で、算用数字は新編国歌大観番号である。引用本文には便宜上わたくしに仮名に漢字を当てたところや通行の漢字に改めたところがある。

一、日吉社について

日吉社は、比叡山東麓に鎮座する日吉大社のことであり、山王権現とも呼ばれ、延暦寺の守護神・天台宗護法の神として、また都の鬼門に位置することから国家鎮護の神として発展してきた。比叡山を表す「ひえ」という語に「日吉」の字を当てたことから「ひえ社」とも「ひよし社」とも呼ばれ、「日好し」「日々好し」という意味として、

御幸する高嶺の方に雲晴れて空に日吉のしるしをぞ見る

（千載集・神祇歌・中原師尚）

というように和歌などに詠まれることもある。

祭神については【表1】に挙げたように、現在では西本宮系と東本宮系に別れ、西本宮（大宮）には大和の大神神社から勧請した大己貴神を祀って、その摂社として聖真子・客人宮があり、東本宮（二宮）には地主権現である大山咋神を祀って、その摂社として十禅師・八王子・三宮があり、それらを総称して山王七社・日吉七社とも呼ばれている。

そして平安時代には仏が仮の姿で現れるという本地垂迹説（天台神道の考え）から七社に本地仏がそれぞれ定められた。例えば『袖中抄』第九には「日吉大明神と申すは三輪明神を伝教大師の天台宗守護神のために勧請し奉り給へると申は大宮権現也。大ひえと申す。二宮は地主なり。をひえと申す。大宮は本地は尺迦、垂迹は法形なり。二宮本地は薬師、垂迹同レ之」とある。[7]

しかし祭神に対する本地仏は一定ではなかったようで、中世期

【表1】山王七社

	現社名	旧称	祭神（諸説など） 現在	祭神（諸説など）	本地仏
西本宮系 本宮	西本宮	大宮	大己貴神	大比叡 大宮権現。三輪明神を勧請。鳴鏑明神・天照大神	釈迦如来
西本宮系 摂社	宇佐宮	聖真子	田心姫神	天忍穂耳尊。宇佐八幡と同神とも。	阿弥陀如来
西本宮系 摂社	白山宮	客人	菊理姫神	白山権現を勧請。伊弉冉尊	十一面観音
東本宮系 本宮	東本宮	二宮	大山咋神	小比叡 山王権現。山末之大主神（古事記）・国常立神	薬師如来
東本宮系 摂社	樹下宮	十禅師	鴨玉依姫神	十禅師権現。瓊々杵尊・天児屋根・荒人神	地蔵・弥勒など
東本宮系 摂社	牛尾宮	八王子	大山咋神荒魂	天照大神奇魂・天照大神の五男三女・国狭槌尊	千手観音
東本宮系 摂社	三宮宮	三宮	鴨玉依姫神荒魂	三女神（田心姫・湍津姫・市杵島姫）、白髭明神を勧請とも。	普賢・大日など

の日吉社について書かれた書物（貞応二年編著の『耀天記』や、室町時代成立の『厳神記』など）から拾い上げると、【表1】にはその全てを挙げたわけではないが、様々な祭神説があったことがわかる。[3]

また社殿に関しては、一五七一年の比叡山焼き討ち以降、十五年後には祝部行丸の手による大宮の再建を始めに、御神体・本地仏像などの造立も行われた。しかし、明治の神仏分離令により仏教関係のものが廃され、現在のように祭神も固定された。

二、日吉奉納百首について

まず一つ目の『俊成五社百首』について、松野陽一氏は、「八年越しの大事業であった千載集の撰集を終えた釈阿俊成は、まもなく日吉・春日両社への歌合奉納を思い立つが、詠作を依頼した歌人達の協力が得られず、やがて自歌百首の奉納に企画を変え、更に対象を五社に発展させ」（『藤原俊成の研究』笠間書院・一九七三年）たもので、「千載集完成の謝意、生涯の総決算の意をも込め、且つ家門再興の悲願を秘めた新たな出発をも決意した詠作」（同上）と述べている。そしてその五社百首所収の日吉百首は、俊成七十七歳の文治六年（一一九〇）春に奉納された百首である。

次に二つ目の『為家七社百首』について、為家は祖父俊成の五社百首に倣って、伊勢・賀茂・春日・日吉・住吉の五社に奉納する予定であったものに、石清水・北野の二社を加えて七社百首としたものである。これについて佐藤恒雄氏は、「撰者拝命が直接の機縁」（『藤原為家研究』風間書院・二〇〇八年）とし、反御子左派の真観の「盛んな将軍への接近の動きとまさに時期を同じくして詠まれていることは注目しなければならない」（同上）と指摘している。そしてその七社百首所収の日吉百首は、為家六十四歳の文応二年（一二六一）に奉納された百首である。

三つ目の『阿仏五百首和歌』について、もと十社百首であったものが前半部分（走湯山・三島社・箱根社・若宮・稲荷社への五百首）は散佚し、後半部分の五百首からなるもので、鎌倉の新熊野・荏柄・新賀茂・新日吉、常陸国の鹿島社に奉納された五社百首のことである。夫為家の死後に細川庄をめぐって二条家との相続争いが起き、その訴訟のため阿仏尼は単身鎌倉に下ることになり、その折に奉納百首を次々と詠んだ。この五百首所収の「新日吉の百首」は、その端書に、

この百首は、亀ケ谷の新日吉の社に奉る。弘安四年三月十一日のつとめてよりはじめて、同十三日の夜中に詠みはて

つ。その後まぎるる事どもありて、同三月廿二日きよがきて、その社のたよりある人につけてまゐらせつ。

とある。鎌倉の亀ヶ谷にある新日吉社に奉納された百首であるが、新日吉社はその名称から近江国の日吉社より鎌倉に分祀された神社と思われる。したがって同じ神への奉納和歌として、先の二人の日吉百首との比較対象としても問題ないと考える。

三、奉納意識と和歌表現

次頁に挙げた【表2】は、三者の百首の和歌から、日吉社を意識して詠まれたと思われる「神祇的要素」、つまり神や神社・神域・神事・神官・神田などをあらわす表現を抜き出し、各項目ごとに分類したものである。一首の中に神祇的要素が複数ある場合、それぞれの項目に重複していることもある。また最後の合計の部分は延べ数ではなく、日吉社を意識して詠まれた和歌を一単位として合計している。

ここから言えることは、為家の日吉社に関する表現の多さと、それに対して、俊成の極端に少ないという点や、あまり詠まれることのない固有名詞（例えば児屋根・三津川・橋殿など）が為家の和歌にはあるという点である。以下、これらの点について考察したいと思う。

(1) 俊成の場合

俊成の百首から日吉社を示す表現が詠まれている和歌に、

①神山や杉の茂みの去年の雪消えぬ印を残すなりけり　［残雪］

②よそながら今日の日吉の祭にも賀茂の御阿礼のあふひなりけり　［葵］

③頼むかな我が立つ杣と祈りおきて山のかひある嶺のけしきを　［山］

④比叡小山岩きり通す谷川の早きしるしを猶頼むかな　［川］

⑤世を照らす日吉と迹を垂れてけり心の闇をはるけざらめや　［述懐］

がある。①「神山」は日吉権現が鎮座する山（小比叡）のことを指し、③「我が立つ杣」は為家も五首も詠んでいる表現であるが、比叡山中堂建立の時に伝教大師が詠んだとされる古歌で、『和漢朗詠集』『俊頼髄脳』『奥義抄』『古来風体抄』など詞華集や歌学書に度々引用される「阿耨多羅三藐三菩提の仏たち我が立つ杣に冥加有らせ給へ」という和歌から比叡山（大比叡）を示す歌語となっている。⑤「（子を思う）心の闇」を照らす「法

灯」として、本地垂迹した日吉の神を称えている。これらの和歌は中世期の神道における一般的な考え方を示している。

では、先ほど確認したように、俊成の日吉百首では社に関する表現がかなり少なく、為家の五分の一もないという結果になったのはなぜであろうか。しかも、『俊成五社百首』の各百首において社に関係のある地名が詠まれた歌の総数は、春日社四十

【表2】日吉社に関する神祇的要素　（　）内は堀河題。

項目／人物	俊成	為家	阿仏尼
神社・神・神代	日吉（述懐）	日吉（桜）・日吉神（逢不遇恋）・神（子日・郭公・片思・松・鶴・述懐）・我が神（神楽）・児屋根（蓬）	日吉社（神楽）・日吉神（鶴）・神（述懐）・神代（松・祝）
神山	比叡小山（川） 我が立つ杣（山） 神山（残雪）	登る山（橋） 我が立つ杣（月・雪・山・山家・祝） 神山（紅葉・苔・懐旧）	小比叡の杉（祝） 比叡山（山）
神域		神の瑞垣（薄）・神垣（萩・更衣・虫）・神の御室（桜）・百敷の御垣（竹）	神の御垣（子日）・玉垣（萩）・いづこの杜（卯花）・神の御阿礼（葵）
川・橋など	谷川（川）・御祓川（六月祓）	三津川（蛍）・走井（泉）・橋殿（橋）	橋殿（橋）・川瀬（六月祓）
摂社		唐崎（霞・郭公・六月祓・松）	唐崎（松）
分社			ここ（神楽。鎌倉新日吉社のこと）
神事	日吉の祭（葵）	神祀る（卯花・葵）・開くる御戸の広前（菊）	
採物など	榊葉（神楽）	榊葉＋木綿（榊・卯花）・諸葛（葵）	
神官・巫女		宜禰（虫）・宮人（神楽・逢不遇恋）・八乙女（更衣・薄）	神の宮つ子（萩）
参拝者		祈る諸人（菊）・我と祈りこし人（別）	
神田・神領		志賀の浜田（春駒）・御戸代小田＋標（苗代） 志賀の神田の御戸代（早苗）・志賀の山田（田家）	志賀田（苗代）・神の樫ゆふ御田屋（早苗）
合計	7首	38首	17首

一首、日吉社二十五首、住吉社五十首、賀茂社三十八首、伊勢社三十九首であり、日吉社がある近江国は比較的多くの歌枕を有しているにもかかわらず、五社百首の中では日吉百首が一番少ない状況である。また、先に挙げた佐藤氏は『藤原為家研究』で、『玉葉』の記事から「御子左家の日吉社参詣は、俊成に始まった」と指摘するが、この俊成の日吉百首にはそういった信仰を示すような表現が少ないように思われる。

その理由として、五社百首の成立過程が関係していたのではないだろうか。成立過程について五社百首の序によると、最初は春日・日吉両社への歌合の予定であったが、思うように和歌が集まらなかったため、個人の奉納百首に変更し、のちに住吉・賀茂・伊勢の三社への百首も加えた。つまり俊成が百首を詠み始めた当初は春日・日吉両社だけを意識していたということができるだろう。

そして、次に当時の俊成の心理面を探る手がかりとなる資料として、藤原兼実の日記『玉葉』安元二年（一一七六）十月二日条に俊成出家の記事がある。

人伝、五条三位俊成、日来煩咳病、去月廿八日両度絶入、第二度絶入之度経両三刻、人皆存一定之由、而験者一人残留、猶加持、遂蘇生。自春日明神託給云々、困不帰向、俄有此罰、然而於今度者、不可有殊恐云々、即復例了、其後雖非尋常、大略平減云々、其獲麟之間出家了、件人本奉憑春日、今改帰敬日吉、此十余年以来、都不参詣春日、連々参籠日吉云々、雖末世、神明之厳重可恐事歟、

（『九条家本玉葉』図書寮叢刊による）

とあり、兼実が伝え聞いた内容として、俊成が出家にいたるいきさつを書き留めている。それによると、日頃から咳病を患っていた俊成は二度も人事不省に陥るも加持によって蘇生するという出来事があった。それが春日明神の神託により神罰と判明し、その後やや回復した俊成は出家することになったという。神罰の下った理由として、「件の人、本春日を憑み奉る。今改めて日吉に帰敬す。此の十余年以来、都べて春日に参詣せず、連々日吉に参籠す」とあり、俊成は春日社を信仰していたにもかかわらず、十数年前からは日吉社を敬うようになって日吉にばかり参籠するようになっていたことが原因で、春日社の神罰が下ったというのである。このことに対し、兼実は「末世と雖も神明の厳重恐るべき事か」と締めくくる。

こうして出家に至る出来事から十四年後に春日・日吉両社への百首を詠むことにした俊成は、春日明神の神意を配慮して、意図的に春日社よりも神社に関する表現が多くならないように、

日吉百首を詠んだものと考えられるのである。

次に、『俊成五社百首』における日吉社以外の他社への百首から最後二首ずつ、つまり堀河題九十九番目「述懐」と百番目「祝」の和歌をそれぞれ各社の百首から抜き出すと、以下の通りである。

〔春日・述懐〕 春日山谷の松とは朽ちぬとも梢にかへれ北の藤波

〔春日・祝〕 天が下のどけかるべき君が代は三笠の山の万世の声

〔住吉・述懐〕 和歌の浦の道をば捨てぬ神なればあはれをかけよ住の江の波

〔住吉・祝〕 四方の海も長閑なれとぞ住吉の津守浦に迹を垂れけん

〔賀茂・述懐〕 祈りおきし心のうちを御手洗の末にあひみん事ぞ嬉しき

〔賀茂・祝〕 君が代は賀茂社の姫子松十返り花も咲かんとすらん

〔伊勢・述懐〕 けまくもかしこき豊の宮柱なほき心は空に知るらん

〔伊勢・祝〕 君が代は千世ともささじ天の戸や出づる月日の限りなければ

これら傍線部分「春日山」「三笠山」「住江」「津守浦」「御手洗」「賀茂社」「豊の宮柱」「天の戸」は、いずれも奉納先に関係する場所や神名である。つまり堀河題によって奉納百首が詠まれる場合、最後の二首「述懐」「祝」の和歌は、いわば「社頭の述懐」や「社頭の祝」として詠まれる傾向にあると言える。それに対し、日吉百首の最後の二首は、

〔日吉・述懐〕 世を照らす日吉と跡をたれてけり心の闇をはるけざらめや

〔日吉・祝〕 君が代は藐姑射の山に千世をつみて富士の高嶺に立ちまさるまで

とある。「藐姑射の山」つまり仙人の住む中国伝説上の山に仙洞御所の意味を響かせて、千載集編纂の下命者であった後白河法皇に対する寿ぎを詠んでいる。法皇はその生涯に於いて熊野へ三十四度参詣していることは有名だが、日吉社へは少なくとも四十度程度は参詣している。[3] また、今熊野社だけではなく、都に新日吉社を勧請もしており、日吉信仰と深く結びつく人物であると言える。こういった理由もあるかもしれないが、日吉百首の最後を飾る「祝」の歌であるにもかかわらず、日吉の神の威徳を示す表現がないということも、先程確認した春日明神へ

の配慮が関係しているのではないだろうか。

(2) 為家の場合

為家の日吉百首の中で特徴的なものに、あまり和歌には詠まれない表現が詠まれている点がある。

①三津川の岩間の浪に飛ぶ蛍砕くる玉の消えぬとぞみる［蛍］

②夏をこそ知らで過ぎぬれ走井の辺りは秋に早なりにけり［泉］

③橋殿の真木の板橋石橋に続きて登る山ぞかしこき［橋］

④頼むかな児屋根の藤の一つなるもとの誓ひをかけてまつとて［藤］

まず、①「三津川」について、時代はやや下るが、天台系の学僧（室町期か）の手になったものと言われる『厳神鈔』山王権現鎮座御事から、「大宮権現の鎮座」の部分を引用する。

大宮権現ト申スハ、大和国三輪ノ社ヨリ御影向、三輪ノ明神ハ素戔嗚尊御子大物主神、又奉号大己貴命、（人皆脱カ）天皇ノ御宇ニ坂本ヘ御影向有ケルガ、大津ノ八柳ニテ、ツカレニ臨玉ヒシカバ、行歩モ難治ニテ、田中ノ恒世釣舟ニ便船シ御座ス、志賀ノ唐崎ニ至玉フ、恒世船中ニ持ケル粟ノ飯ヲ献ジ奉リケル、サテ唐崎ノ琴ノ御館ニ対シテ、我ハ是神明也ト、名乗玉フ、…其後五色ノ波ノ源ヲ尋玉フニ、今ノ三ツ川ヨリ流下タル三塔谷川、一ツニ落合テ潮海ニ流レ入ル、故ニ三ツ川トハ云ナリ、次第ニ此川ヲ尋ネ上リ玉フニ、先ヅ石ヲ占井ニ至リテ、石上ニタヽズミ、何ヅ方ヘ尋ネ行カンズルヤラント、足占ヲ蹈玉ニケルニ、石占井ノ明神女体ニテ御座シケルト、川ノ水上ヲ委ク教ヘサトサセ玉ヒキ、大宮権現御メシワラグツヲ脱ギ、御足ヲスヽギ玉ヒテタチ玉ヒケル、其ノ石、今ニ彼所ニ有ト云々、次第ニ大宮権現ノ前橋殿ニ至リテ、五色ノ流此所ニ留リケル、故ニハシドノトハ、波止土濃（ナミト・マリツチコマヤカナリト）皆也…（神道大系による）

とあり、天智天皇の時代に三輪明神であった大己貴神が、唐崎から川を上って大宮権現となるいきさつが描かれている。その傍線部に示すように、比叡三塔からの谷川が一つに落ち合って潮海（琵琶湖）に流れ入るので三津川というとある。おそらく三津川は現在の日吉社境内を流れる大宮川と思われるが、日吉社の縁起にも関わるこの三津川を舞台にして、蛍の飛ぶ情景を為家は詠んでいるのである。

次に為家の和歌②「走井」について、「水が勢いよく湧き出る」という意味ではあるが、これも日吉社境内のことと思われ

る。その理由として、『拾玉集』所収の歌群（4699－4708）に、

某甲六十有九之歳、貞応第二之暦以三伏孟秋之比、秋霧雖纔急厄、自九月初冬之候、冬雪積社参庭、而今改年満七旬朝法施向百日之時、驚一生之由来、啓七社之本誓、其詞云

ⓐ七十に満ちぬる春ぞあはれなる百よをあかす神の斎垣に
ⓑ思ふべし夢か現かいかにしていかにふけぬる我が世なるらん
ⓒましら遊ぶ神の台に春たちて心に結ぶつららをぞとく
ⓓ繰り返し結ぶは神の誓なればをはり乱すな賤のをだまき
ⓔ二つなき御法を百よたむけきぬ七ます神は三の山もと
ⓕ神垣や山わけ出づる三津川のはしたなきまで頼むとをしれ
ⓖいかにして心けがさじ走井の清き流れのすすがざらめや
ⓗおきつ浪いく度かけて契りけむうき世をいかに志賀の唐崎
ⓘ何事もあらずなり行く世中に残るかひなき身をいかにせん
ⓙ今はただ我が山もとに庵しめて外にはけたし夜半の煙を

とある。これは、生涯四度も天台座主に就任した慈円が六十九歳の折に山王七社の「本の誓」として詠んだ十首の歌群である。その表現を見てみると、ⓐ「神の斎垣」、ⓒ「ましら遊ぶ神の台」は神の使いの猿が遊ぶ日吉社のこと、ⓔ「七ます神」は山王七社のこと、ⓕ「神垣や山分け出る三津川」これも先ほど確認した川であり、ⓗ「志賀の唐崎」は大宮権現が影向した場所、ⓙ「我が山もと」は比叡山を指す。そうした日吉社関係を詠んでいる歌群の中で、ⓖ「走井」は、下の句に「清き流れのすすがざらめや」とあるので、これは日吉社の清めのための泉と思われる。したがって、日吉社のことを詳しく描くことにこだわりを見せる為家の和歌②「走井」も社の清めの泉であり、納涼の場としていち早く秋になったことを詠んだものであろう。

また、後の作品ではあるが、祝部行丸が元亀焼亡（一五七一年）以前の社頭の状況などを詳細につたえる史料をもとに基づいて記したという『日吉社神道秘密記』（天正十年成立）には、

二 波之利祓殿（清浄水流出、以之祓也、伝有一説、是は水社之登場ナリ、）日御供以二此水一調二進之一、浄水故也、二宮、十禅師之供華ノ水ハ以レ之調、大宮之供華ノ水ハ波止土濃ノ水也。坂本中ノ諸家内浄事ハハシリノ水也、竈洗湯立等悉此水也、汚穢祓女人月水之浄水是也、参社諸人用レ之、（神道大系による）

とあり、「波之利祓殿」が浄水に使用されていたことがわかる。また、近世初頭の豪観の『日吉山王権現知新記』に、

一、走井橋有二橋也、七間五尺二寸、横七尺二寸
一、走井社有二小社一、背有二朱塗欄干、前有二三間社也、祓戸神也

一、走井在二岸頭一、清流落二石樋一、触穢除服之人詣二此処一沐浴祓除

（神道大系による）

と記されているが、この走井橋（重要文化財指定）や走井社（小さな祠）は現存している。おそらく為家や阿仏尼の時代にも「走井」が神聖な場所、つまり山王二十一社の中社や下社ほどではないにしろ、小さいながらも祠があった可能性も考えられる。

次に為家の和歌③「橋殿」について、先に挙げた『厳神鈔』の引用本文に付した二重傍線部分には、三津川を遡った大己貴神が大宮権現前の橋殿にたどり着き鎮座したとある。そして五色の波がその場所に留まっていたので、「波止土濃（波とどまり土こまやかなり）」と書くのだという。つまり「橋殿」は大宮権現が鎮座した場所であった。

また、時代が下る作品であるが、信長の比叡焼き討ちの後に日吉社再建の目的に、祝部行丸が作らせたという『山王二十一社等絵図』の中に「波止土濃」の絵があり、板の反り橋に屋根が付いた構造になっている。文保二年成立『日吉山王権現知新記』（豪観）には、

一、橋殿名二通天橋一、旧跡

大宮楼門前在二谷川上一、有二欄干、屋根唐破風一、燃二夜灯九灯一、供二七社各一灯、中七社一灯、下七社一灯一也。云、

大宮御座所波止土濃一是也、最山王神道根源所也、

とあり、欄干や屋根付の橋で燈籠もあったようである。ちなみに現在では石橋の板石部分が途中から失われて渡ることができない状態で、大宮権現の鎮座にまつわる伝承地とは思えない扱いになっているが、為家の時代の橋の構造については、和歌③「橋殿の真木の板橋石橋に」とあるので、以前には板橋であったものが石橋になったということであろう。この歌表現のように、その後も板橋になったり石橋になったりして、現在では石橋の一部だけが残っている。

また先に挙げた『日吉社神道秘密記』には、

…波止土濃ヨリ東塔坂ヘ登リ、又補渡解谷ヘ登リ、神宮寺ヘ登ル、此寺ハ伝教大師開闢之処也、神宮寺ヘ登リ、岩阿橋ヘ登リ、方々道アリ、社頭ヘ参入道七道有、○大橋ヨリ参向諸人祈念所、○波止土濃ヨリ上下山上ノ道アリ、…

とあり、日吉の社から橋殿を渡ると比叡山への登り口になっている。為家の和歌③でも「続きて登る山」とあるのは比叡山（大比叡）のことである。

散文作品では例えば『平家物語』巻一・願立に「大宮の波止土濃より八王子の御社まで回廊をつくッてまいらせむとなり」（新日本古典文学大系）とあるが、和歌の世界において日吉社の橋

殿を和歌に詠み入れたものは為家や阿仏尼の歌以外には未見で、『慈鎮和尚自歌合』七番の詞書に、

大宮の橋殿にて

照る月の光と共に流れ来て音さへすめる山川の水

とある程度である。和歌に詠まれることのなかった「橋殿」を、為家や阿仏尼は詠んだのである。その阿仏尼の歌が、

立ちかへり又渡らばや日吉なる大宮方の橋殿の橋　［橋］

であり、山王権現の縁起にも関わる重要な場所で、和歌において目新しい表現を詠んだこの為家の詠③を受けて新日吉百首に詠み入れたと思われる。地名の選択においても為家の影響があったと言えよう。また、上の句に「又渡らばや」とあるので、阿仏尼には既に日吉参詣の経験があるようだが、もしかすると為家とともに参詣したのかも知れない。

それでは、なぜこれほどまでに為家の百首では社の具体的な描写が多いのかを考えたいと思う。次の【表3】は、『藤原為家研究』（前出）所収の年譜を参考に、【明月記】における為家の日吉社参詣に関する記述を抜き出し、簡単にまとめた。

このように、為家は幼少の頃から父定家や母親に連れられ日

【表3】【明月記】における為家の日吉社参詣

1202.06.21	三名（5）父に伴われ参籠通夜して28日帰宅。	
1204.05.15	三名（8）母等に引率され七日間参籠、22日帰宅。	
1205.07.05	三名（8）ら父の宿願により百日参籠を始める。	
1206.12.19	為家（9）ら父に連れられ参籠。	
1207.06.28	為家（10）ら父に連れられ参詣。	
1207.08.13	為家（10）ら参詣。	
1212.04.24	為家（15）父に連れられ参籠。翌月2日に帰京。	
1212.12.02	定家室、男女子息を連れ参詣。	
1225.03.21	為家（28）子を連れて参籠、28日帰洛。	
1226.04.14	為家（29）日吉社賀茂社に参詣。	
1226.08.25	為家（29）七箇日参籠	
1229.04.17	為家（32）参籠、24日帰京。	
1229.12.26	為家（32）参詣。	
1230.03.20	為家（33）参籠七箇日。	
1231.08.16	為家（34）為氏を連れ参詣、翌日帰宅。	
1233.03.02	為家（36）参詣し、翌暁の大殿開に臨む。	
1233.07.07	為家（36）大殿開に臨むため昨夕より参詣	
1235.01.17	定家、孫為氏を連れ参詣。	
1235.10.08	為家（38）参詣。	
1235.11.12	為家（38）園城寺の大僧正を訪れ、日吉社参詣、明暁の大殿開に参会し帰洛。	
1235.12.18	為家（38）参詣し即日馳せ帰る。	

吉社を参詣しており、成人後はひとりで何日間も参籠をしたり、時には息子為氏を連れたりしている。そして年に何度も参詣や参籠をしている。その後も、為家の和歌資料や譲り状などから、日吉を参詣していることは知られる。おそらく日吉社に毎年何度も参詣や参籠をしていたのであろう。

このような為家の日吉信仰は、父定家の影響ということが考えられる。定家が日吉社を深く信仰していたことについては、石田吉貞氏が『藤原定家の研究』（文雅堂書店・一九五七年）において指摘されている。石田氏によると『明月記』の記事に日吉への参詣六十三回、参籠四十八回、通夜百三十五回あり、それに対して春日社参詣は四回（一回は明月記に拠らない）とある。圧倒的な日吉社への定家の傾倒ぶりが指摘されている。

以上のように、俊成・定家・為家の御子左家が日吉社を信仰する理由として、最初に示した【表1】のように、山王七社の十禅師の祭神に「天児屋根」説があることから、佐藤氏（前掲【藤原為家研究】）は次のように述べている。

…御子左家の日吉社信仰は、藤家の祖たる天児屋根命祭神説の定着と関係がありそうに思われる。藤原氏の氏神である春日神社の祭神は、第一殿、武甕槌命、第二殿、経津主命、第三殿、天児屋根命、第四殿、比売神であり、藤原氏とは直接的には第三殿の天児屋根命が関係している。俊成が距離的に近い日吉社参を主とする信仰に傾いていったのは、その祭神が同じであること、すなわち氏神の代替となり得るとの認識があったからではなかったかと推察され、前引（【表1】における俊成出家の記事）の俊成の事跡に就けば、それはまさしく俊成の時代に確立されたのではあるまいか。

（文中の＊の部分は私に註を施した）

とあり、御子左家において俊成の代から日吉信仰が行われ、十禅師宮の神が天児屋根と見なされたことによると指摘する。

そこで、『為家七社百首』の和歌を確認してみると、天児屋根命を詠んでいる歌が二首存在する。

［日吉・藤］　頼むかな児屋根（こやね）の藤の一つなるもとの誓ひをかけてまつとて

［春日・祝］　万代も一つにまもれ天照るや天児屋根（あまのこやね）の同じ契（ちぎり）に

であり、前者は日吉百首の「藤」の和歌で、後者は春日百首の「祝」の和歌である。為家は春日社の祭神である天児屋根を春日百首に、山王七社（十禅師）の祭神である天児屋根を日吉百首にそれぞれ詠んだということであろう。これらの和歌は先の佐藤氏の説を裏付ける資料になりうると言えよう。そういった為家の日吉信仰であるが、彼の百首には日吉社に対する思いを詠

んだ和歌が他にもある。

⑤我が頼む心ひとつは神も見よ又たぐひなき唐崎の松　［松］

⑥身を隠す小倉の山の麓にも我が立つ柚を見てぞ慰む　［山家］

⑦神山に老いの姿のかはるにも昔のあととなほ頼むかな　［懐旧］

⑧うまれいでていま老いらくのけふまでに思ふは神のみことなりけり　［述懐］

とあり、⑥和歌では為家の住む小倉山の麓から遠く都を挟んで比叡の山脈を眺めている姿や、⑦⑧和歌では幼い頃から父に連れられ、成人後も年に何度も参詣して、老境の今まで長年、心の拠り所としてきた日吉社に対する思いが詠まれている。

(3)　阿仏尼の場合

阿仏尼の百首は、鎌倉滞在中に亀ヶ谷にある新日吉社へ奉納されたため、

①卯花の白木綿かけてこの頃やいづこの杜の神祀るらん　［卯花］

②都出でて久しくなりぬ今年だに神の御阿礼にあふひしらせよ　［葵］

③八乙女や神楽男の声すなり日吉の社ここにうつして　［神楽］

④唐崎の松にかけても契りけん神代忘るな波の白木綿　［松］

⑤鶴の子の数多千年を祈るとは空に日吉の神ぞ知るらん　［鶴］

⑥比叡の山峰にかかぐる灯は君が代照らす光なりけり　［山］

⑦立ちかへり又渡らばや日吉なる大宮方の橋殿の橋　［橋］

⑧世々古く神に契りしあとなればその子と祈る道を断れ　［述懐］

⑨迹垂るる小比叡の杉の印とて神代久しく色もかはらず　［祝］

とある①～③の和歌は、直接の奉納先である分社（鎌倉の新日吉社）の情景を詠んでいるものと思われ、④以下の和歌は本社（近江国の日吉社）を想定して詠んでいるものである。

また、⑧和歌「世々ふるく神に契りしあと」とあり、先程から確認したような俊成から為家にいたる御子左家が日吉社を信仰の対象としてきたことを述べ、継承者である我が子のため歌道家の不条理をただせと、強い語気で表現している。

四、奉納意識と題詠

次頁の【表4】は、三者の百首に詠まれている地名を地域別に分類したものである。これを見ても、為家の表現の多さが目

【表4】日吉社周辺地域　（　）内は、堀河題。

		俊成	為家	阿仏尼
近江国	西～西南岸	比良山風十三津浜（搗衣）	高島や勝野原（萩）	
湖周辺		真野入江（千鳥）	比良山（若菜・残雪）	
		志賀浦（立春・五月雨）	比良山風（搗衣・初冬・霰）	
		志賀浜松（子日）	真野浦（衆草）	真野入江（海）
		志賀山（藤）、志賀山越（紅葉）	志賀浦（立春・残雪・搗衣・千鳥・鶴）	志賀田（苗代）
		長等山（五月雨）	志賀の都（萱・杜若・花橘・初秋・九月尽）	
		粟津原（野）	古郷（萱・藤袴・荻）	
		逢坂関（駒迎・初逢恋・晩・関）	長等山（鹿）	
	湖	鳰の海（立春）	粟津野（鹿狩）	
			逢坂（駒迎）	逢坂（駒迎）
	浦など	浦のさざ波（藤）	鳰照る海（霧）、さざ波や鳰の浮き巣（水鳥）	近江海（河）
			海山の堺（五月雨）、遠き汀（氷）	湊いる鳰の浮き巣（水鳥）
			浦より遠（萱・春雨）	
	川（南岸）	瀬田長橋（橋）、田上川（網代）	瀬田長橋（霜）、田上川（網代）	瀬田川（河）、宇治川（網代）
	東岸	筑摩沼（菖蒲）	筑摩江の入江（菖蒲）	筑摩江（菖蒲）
				鏡山（立春）
近隣国	美濃国			不破関路（関）
	山城国	小野山（早蕨・炭竈）	氷室山（氷室）	氷室山（氷室）
		音羽山（巷）、賀茂の御阿礼（葵）	大原里（炭竈）	都（立春・桜・葵・月）、故郷（萱）
		入野原（海）	身を隠す小倉山の麓（山家）	来し方（雁・千鳥）
				慣れ来し方（更衣）
合計		20首	32首	17首

立つ。また、俊成や為家の和歌では、日吉社がある琵琶湖西岸から南岸にかけての表現が多いのに対して、阿仏尼は二首しかないが、「都」を想定して詠んだ和歌が多いという特徴がある。では具体的に和歌を見ていく。

(1) 為家の場合

①さざ波や浦より遠の朝霞たえだえ見ゆる春の曙　［霞］
②霞かと浦より遠に見えつるやこち吹く風の誘ふ春雨　［春雨］
③古里の志賀の都のつぼ菫摘むや昔の形見なるらん　［菫］
④跡もなく志賀の都はふりにしをそれかと咲ける杜若かな　［杜若］
⑤袖ふれし昔をいかにしのぶらん志賀の都に残る橘　［廬橘］
⑥たちかへり人こそとはね古里の志賀の都に秋はきにけり　［立秋］
⑦露しぐれまた降りすててさざ波や志賀の都に秋もいぬめり　［九月尽］
⑧秋のきてほころびにけり藤袴古里人の形見とやみん　［藤袴］
⑨古里はいく秋かけて荒れにけん垣ほの荻に風を残して　［荻］

まず①②「浦より遠」という表現は「入り江になっている所よりも遠くに」という意味であるが、①「春の曙」が見えたり、②東風により雨雲がやって来る様子が遠くに見えたりするとあるので、いずれも琵琶湖西岸から東側を望んでいることがわかる。したがってこれらの和歌は、日吉社のある坂本、あるいは大比叡の山から湖より遠く東側を眺めた風景を詠んでいる。

次の③～⑨「古里」「志賀の都」は、いずれも天智天皇の大津宮（近江京）の跡地のことであり、為家は同じ場所を何度も詠んでいるのである。このように堀河題の四季部において繰り返し同じ場所を詠むということは、当地の四季の風景を描きたかったということであろう。言い換えれば、日吉社からのぞむ四季の変化を、この堀河題の四季部で再現したかったのではないだろうか。

(2) 阿仏尼の場合

阿仏尼の和歌は、旅人意識で詠まれている和歌が多い。

①東にも花の所はかはらねばただこの程ぞ都忘るる　［桜］
②つくづくと我が旅衣春雨に涙をかけてほさぬ袖かな　［春雨］
③しばしとてたちはなれても春駒の手馴れし人をいかにこふらん　［春駒］

④こし方に雲居雁の帰るさを猶よそに見て春や暮れなん　［帰雁］

⑤忘れめや志賀田の面の畦伝ひ苗代水をこえしゆききも　［苗代］

⑥尋ねばや昔の宿にたちかへりわが見しままの春の藤波　［藤］

⑦惜しむぞよ東の方に来ても又今年三年の春の別れを　［三月尽］

⑧日にそへて慣れこし方の移り香の薄く隔つる夏衣かな　［更衣］

⑨都出でて久しくなりぬ今年だに神の御阿礼にあふひ知らせよ　［葵］

⑩いとど猶ねやなきそへん郭公涙ふりにし昔かたらば　［郭公］

⑪ともしする夏のは山の鹿ならでしか待つことはたれもおとらじ　［照射］

⑫見し人の形見の水となりにけり影もとまらぬ宿の泉は　［泉］

⑬東路の浦風なびく尾花にも真野の入江の面影ぞたつ　［薄］

⑭いまさらにたちかへるべきくまぞなき世を秋霧と身はうかれても　［霧］

⑮いくたびか都の月をうつすらん関のこなたの秋の涙に　［月］

⑯なくなくも年々慣れぬきりぎりす旅寝寂しき草の枕に　［虫］

⑰古郷にあとや見ゆらん東路の雪につけても通ふ心は　［雪］

⑱諸共に旅の空なる友千鳥こし方思ふねをやなくらん　［千鳥］

⑲わが袖や身をうぢ川となりぬらんひをのよるよる波はさはぎて　［網代］

⑳おしめどもとまらず暮れて行く年のやよいかなれば身につもるらん　［歳暮］

とあるように、実際の鎌倉滞在中の自身を想定して百首を詠んでいるため、自ずと日吉社（近江国）方面や都を思慕する和歌が多くなる。

春部①桜によって一時だけでも「都忘るる」ことができたとするが、それは普段から望郷の念を抱いているということでもあり、また④「雲居雁」が帰って行く様子を「よそに見て」自分には叶わないことだと嘆いたり、⑤鎌倉下向の旅路において実際に見た「志賀田」の様子を思い出したり、⑦鎌倉滞在の三年目の春が過ぎていく時の経過に苛立ちを覚えたりしている。夏部⑧⑨では都から離れて長いときが過ぎたことから、いつになったら帰京できるのかと神に願ったり、⑫今は亡き夫為家のことを思い出したりしている。また秋部⑮「関のこなた」（鎌倉）である自分と遠く隔たる都への思いから月を見て涙する様子や、冬部⑲⑳では無駄に時間が過ぎていくことへの嘆きが詠

まれている。

阿仏尼が鎌倉下向時に近江国を通過したのは、『十六夜日記』によれば弘安二年（一二七九）十月十六～十八日の間で、初冬であった。つまり実際に阿仏尼が見たのは初冬の風景であり、百首詠は春であったため、堀河題の四季部を詠むという設定上、そこには虚構性が生まれることになる。阿仏尼の詠歌時に抱え持つ望郷、懐旧の念や帰京への思い、時間経過への焦燥感など自分自身の心境を、堀河題の四季の変化に託して詠んでいるのである。

このように阿仏尼の百首の特徴は、自身の心情を述べることに主眼が置かれており、述懐的な要素が強いという点にある。堀河題の四季部において俊成や為家の場合は神社にゆかりのある地名を選んで、その風景を描くことで神の威徳を褒め称えるということに主眼を置いていたが、それに対して、阿仏尼は四季の景物に合わせて孤独感や悲嘆、焦燥感など様々な自身の心情を吐露することに主眼を置いているのである。

(3) 和歌表現の比較

それでは、俊成・為家・阿仏尼の各百首の「立春」の歌、つまり堀河題冒頭の和歌を挙げる。

〔俊〕春はまづ鳰の海をや渡るらん霞をよする志賀の浦波

〔為〕たちかはる春の初めの朝氷いつしかとくる志賀の浦波

〔阿〕いづる日のかげやますみの鏡山都に向かふ春の光に

とあり、俊成や為家の和歌では「志賀の浦波」とあるように日吉社から眺められる場所の春の情景が選ばれており、阿仏尼は「鏡山」を詠んでいる。鏡山は日吉社から琵琶湖を挟んで東の対岸にある山であり、確かに日吉社関係の和歌に鏡山が詠み入れられることもあるが、俊成や為家の百首の中では一度も詠まれなかった歌枕である。この「鏡山」を詠み込んだことに、彼女の思いが託されているのではないだろうか。下の句「都に向かふ春の光に」とあり、鏡に反射された光のように、東から出る朝日が比叡の山を越えて都に向かうという情景、そのように自分自身も都に向かいたいのだという帰京の思いを、そこに見ることができるのである。

また、三者が共通して詠んだ地名の一つに「真野」がある。

〔俊・千鳥〕ことわりや真野の入江になく千鳥浦風寒き有明の空

〔為・寒蘆〕冬きては尾花に続く蘆の穂の一つに枯るる真野の浦風

［阿・薄］　東路の浦風なびく尾花にも真野の入江の面影ぞたつ

とあり、俊成や為家はうら寂しい真野の風景を詠んでいるのに対し、阿仏尼は尾花を前にして以前見た真野の風景を思い出すと詠み、旅人の意識として望郷の思いを込めている。

次に「藤」の題については、よく藤原氏の意味も響かせた詠み方をされることも多いが、

［俊］志賀の山松にかかれる藤の花浦のさざ波こすかとぞ見る

［為］頼むかな児屋根の藤の一つなるもとの哲ひをかけてまつとて

［阿］尋ねばや昔の宿にたちかへりわが見しままの春の藤波

とあるように、俊成の場合は志賀山の松にかかる藤という景物を詠んでおり、これも春日神への配慮かも知れない。為家の場合は氏神の天児屋根命を詠んでいる。阿仏尼は藤原氏の意味も響かせ、その息子たちがいる場所への帰京の思いを託している。

おわりに

以上の比較から見えてきたように、まず、日吉に対する信仰の共通認識としては、本地垂迹の神として威徳を称えたり、国家鎮護の神として君が代の安寧を願ったり、中世思想が反映されていた。一方、信仰における相違点としては、俊成は春日神への配慮として日吉の神を称えるような表現をあえて少なくし、反対に為家は氏神として深い信仰心を持って社やその周辺の具体的描写を多くし、阿仏尼は御子左家代々の信仰の対象という神と意識して息子とともに祈願する姿を描いていた。

堀河題四季部を使用して描こうとした表現世界については、俊成の百首では、神意に配慮しつつ、日吉周辺や無関係な地名を詠んだ「普遍的情景描写型」、つまり当たり障りがない詠み方になっていた。為家の百首では、神社の様子やその周辺地域の情景を詠むという「神祇的情景描写型」であり、神社や巫女などの様子を具体的に描くこと、いわゆる社頭の年中行事のように詠むことを主眼としていた。阿仏尼の百首では、強い旅人意識から、四季の移り変わりに託して自分自身の心情を詠み入れるという「述懐重視型」と言える。鎌倉にいる阿仏尼にとって日吉社は都に近いということで、いっそう望郷の念を掻き立てられる様子が窺える。

このように、俊成・為家・阿仏尼の三者の百首は同じ堀河題で同じ神への奉納和歌ということであったが、その詠み方は個人の立場・信仰心が反映され、また奉納和歌として堀河題を詠

む時の意識の違いが確認できるのである。

〔注〕

(1) 『冷泉家時雨亭叢書　中世私家集七』（朝日新聞社・二〇〇三年）所収「阿仏五百首和歌」。

(2) 『歌論歌学集成第四巻』（川村晃生校注・三弥井書店・二〇〇〇年）による。

(3) 軍記物語や説話集などにも本地仏に触れていることもあり、例えば『源平盛衰記』巻四には「大宮権現ははや釈尊の示現なり」、『沙石集』巻一「和光の利益甚深の事」には「日吉の大宮の後にも、山僧多く天狗となりと、和光の方便により て出離すとこそ申し伝へたれ。それも諸社の中に、十禅師、霊験あらたに御座す。これも本地は地蔵薩埵なり」とある。

(4) 源平の争乱期（一一八〇年代）以降における法皇の参詣・参籠については、状勢や費用の関係で熊野詣は自粛され、代わりに日吉社・石清水八幡宮・四天王寺などが増えている。中でも、移動距離の関係もあるのか、日吉社参籠は頻度が高い。（参考：『後白河法皇日録』小松茂美編・学藝書院・二〇一二年）

〔追記〕

なお、本稿は和歌文学会第一〇六回関西例会（二〇一一年七月九日、於 神戸女子大学 三宮キャンパス）での口頭発表を基に作成したものである。

（ふくどめ　たまみ／本学非常勤講師）